なのシング

白萩ユルゾレア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なのシング

【Ｎコード】
Ｎ７４９１Ｋ

【作者名】
白萩ユルゾレア

【あらすじ】
リリカルなのはのキャラクターでＨＥＬＬＳＩＮＧのお話をやっております。キャラ、設定崩壊注意です。あと、なのはのキャラ達が殺したり殺されたりします。

第1話

海鳴市ではここ最近、連続殺人事件が起きている。それはとても奇妙な事件であった。被害者は皆、目立った外傷はなく、遺体から薬物等も検出されず死因がまるでわからないのだ。ただ1つ言えることは、被害にあった者は全員、魂が抜けたように死んでいたことだけだ。

「ハア、ハア、ハア」

八神はやては1人の男に追われていた。恐らくは今、世間を騒がせている連続殺人犯であると、はやては確信する。やはり夜中に1人で出歩くものではないと、後悔しながら走っているいたら、前方に人影が見えた。

「助けてください。怪しい人に追われてるんです」

そう言って助けを求めたが、

「ヒッ」

はやては腰を抜かしてしまった。なぜならば、はやてが助けを求めた人間はまるで生きている気配がなかったからだ。

「追い詰めたぞ。非魔導師はガジェットにならん場合があるからな。おまえはどうだ小娘」

「な、何なんやあんた」

自分の背後にいる殺人鬼が明らかに普通ではないことを感じとったはやては、恐怖で震えながら呟いた。

「ククク、俺か？　俺はだな」

「悪魔だよ」

突然の声だった。そして声は続く。

「悪魔。人の魂を喰らうという禁忌を犯して、化物へと堕ちた魔導師。そして魂を吸われた人間はガジェットとなり、悪魔に使役される」
そう言いながら、声の主である女がはやてと殺人鬼の方へ近づいてきた。
「何だおまえは。」
「私の名前は高町なのは。特務機関『アースラ』のゴミ処理係。あなた達みたいなの専門の殺し屋だよ」
「殺し屋？　殺し屋だ？　本気か？　正気か？　お前？　ククク……殺せ」
殺人鬼が合図をすると、いつの間にか集まっていた魂を吸われた人間――ガジェットが、高町なのはと名乗った女に銃を一斉発射する。いくつもの銃声と共に彼女の体は穴だらけとなり、地面に倒れた。
「もう終わりか殺し屋。ははははははは」
愚かにも自分に挑んできた死体を、殺人鬼は嘲笑う。
「銃なんか撃っても無駄。そんなものじゃ悪魔は倒せない」
死んでいるはずの肉体が喋り出した。死体は立ち上がり、杖を出現させ、構える。
「無駄なの」
そして数多の光の弾が現れ、ガジェット達をち撃ち抜き全滅させた。
「なんだとおおおお！？」
僅か数秒で手下を全て失った殺人鬼は、何が起きたのかわからず叫び声を上げる。
「インテリジェントデバイス・レイジングハートのアクセルシューター。これを喰らって平気な化け物はいないよ。少し頭、冷やそうか」
なのはが、殺人鬼に杖を向けた瞬間だった。
「動くな殺し屋。そこまでだ」

このままだと殺されると直感した殺人鬼は、咄嗟の判断ではやてを人質にとり、盾代わりにした。
「こいつはまだ人間だ。生かしておいておきたくないのか？　大したことじゃない。俺の脱出に手を貸せ。目をつぶるだけでもいい」
交渉を試みる殺人鬼を無視して、なのははやての首にかかっているペンダントを見る。そして、何かを確信したかのような笑みを小さくこぼし、光の弾で人質（はやて）ごと殺人鬼を撃った。
「何いいい！？」
人質ごと自分を撃つなどと思ってもなかった殺人鬼は、ひどく驚いた。なのはは、その隙にとどめの一撃として、素手で殺人鬼の心臓を突く。すると殺人鬼は、体が爆ぜ血と肉塊が飛び散り――死んだ。
殺人鬼と一緒に撃たれたはやては、仰向けに倒れている。そこになのはが話しかけてきた。
「悪魔の心臓を撃つために、あなたの肺を撃った。悪いけどそう長くはもたないよ」
なのはの言う通り、はやては大量の出血をしており、今にも絶命しそうな状態だった。
「どうする？」
朦朧とした意識の中、悪魔の囁きが聞こえた。

海鳴市郊外にある屋敷の一室に、1人の青年がいた。名をクロノ・ハラオウンという。第97管理外世界魔法騎士団『アースラ』の長である。クロノが椅子に腰をかけ、窓から夜空を眺めていると、なのはが部屋に入ってきた。
「任務終了。ただいまクロノ君」
「ああ、お帰り。ところで何だ？　その娘は」

クロノの視線の先には、なのはにいわゆるお姫様だっこをされているはやてがいた。
「この娘は、八神はやてちゃん。今回の標的に襲われそうになってたの」
「ということは生存者か？」
「にゃはは、実はそうでもないんだよねぇ」
と苦笑いをするなのは。クロノにはその意味がわからなかった。いや、意味はおよそ理解できるのだが、脳がそれを拒んだ。
「はやてちゃん、人を悪魔化するロストロギア持ってたみたいで、それが覚醒しちゃったんだよね。それで今、クロノ君が想像している通りというわけなの」
予想が見事に的中したクロノは、
「なにやってるんだバカー」
大声で怒鳴った。
「しかたのなかったことなの」
「プラマイ0じゃないかっ」
口論を始めた2人を見ながら、はやては自分がこれからどうなるのか不安でしかたなかった。

第1話（後書き）

なのはでヘルシングをやるという発想には実は元ネタが存在していまして、ｙｏｕｔｕｂｅの予告編風なのはさんというＭＡＤから妄想をふくらましてみました。

少し用語解説をします。

悪魔――他人の魂を蒐集（リンカーコア）した魔導師。頑丈。

ガジェット――悪魔に魂を吸われた人間。ゾンビ。

アドバイスや感想等いただけると嬉しいです。

第2話

管理外世界魔法騎士団。魔法のない世界へと移住した魔導師達が、現地民との摩擦を避けるために創設した組織である。中央機構はなく、各世界の騎士団は独自の行動をとっている。そんな騎士団で、共通して行っている任務が、魔法露見の阻止である。そのための手段として、悪徳魔導師の排除を行っている騎士団もある。９７番目の管理外世界にある騎士団、『アースラ』もその内の１つである。

海鳴市からそう遠くないとある町で、事件は起きた。１組のカップルが、町の人間を殺し回っているというのだ。通報を受け警察は、直ちに現場一帯を封鎖し、犯人を追跡した。

通報から数時間。犯人は未だ見つからず、時計も深夜といえる時間帯になっていた。そんな行き詰った現場に、１台の車が来た。車の中からクロノ・ハラオウンと、アースラの職員２名が出てくる。

「アースラ機関局長クロノ・ハラオウンです。指揮官はどこですか？」

「は、はい。私ですが……」

突然の来客の突然の質問に、指揮を執っていた警官は、思わず返事をしてしまった。

「警察庁の依頼できました。状況を説明してください」

今言ったことが事実であるのを証明するため、クロノは１枚の紙を指揮官に渡した。それは、紛れもない警察庁から、アースラへの捜査協力依頼書だった。

「しかし……」

「状況を」

なおも説明を渋る指揮官に、クロノは強い口調で迫る。迫られた指揮官は怖じ気づき、話し始めた。
「数時間前、この一帯の家屋の住人全員が殺されるという事件が起こりました。被害者数は３家族１１名。その内６名には、目立った外傷はありませんでした。残りの５名は、ズタズタに引き裂かれ、家の中は血の海という状態です」
状況説明を受けたクロノは、満足そうに言葉を返す。
「了解しました。後は我々アースラにお任せください」
そして、ここ周辺が描かれている地図を広げ、上の方を指差した。
「犯人は、県道１７号を北上しています。その先に彼女らを向かわせました。すぐに片がつくでしょう」

ある一軒家に男と女がいた。しかし、男女はこの家の住人ではない。この家の住人は、無残な姿で殺されていた。殺したのは、血に染まった部屋で抱き合っている男と女である。
「これで４家族目だ」
「あと９つね」
「あと９つ殺せばあいつらにもっと強くしてもらえる。そうすれば俺達、ずっと永遠に生きられるんだぜ」
２人は嬉々とした様子で会話をしていた。
「フフ。今ごろ警察は必死になってるわよ」
「ひゃはは。俺達もう無敵の悪魔サマなんだぜ。警察ごときが止められるもんかよ」
男は、もはや怖いものなどない、といった笑みを浮かべる。その時だった。
ピンポーン。カップルのいる家の、呼び鈴が鳴る。ピンポンピンポンピンポン。呼び鈴は、間をあけず連続で鳴っていく。

「チッ」
男は、うるさいといった表情で、手に持っていたサブマシンガンを構える。
「ちょっと待ってろ。静かにさせてくる」
そう言って男は、玄関の方へ向かう。
「！！」
男がドアの前に立った瞬間だった。複数の光の弾――アクセルシューターがドアを突き抜け、男に傷を負わせる。
今の攻撃で、ドアには穴が開いている。そのドアが開き、アクセルシューターを撃った張本人、高町なのはが姿を現した。男は反撃とばかりに、なのはに銃撃を浴びせる。しかし、悪魔であるなのはに、通常の弾丸など効くはずもない。銃弾が切れ、男の顔は絶望の表情となる。
「こんな好き勝手暴れられると、いい迷惑なの。少し頭、冷やさせてもらうよ」
それは、死刑宣告に等しい言葉だった。
「ひ、ひぃぃ」
なのはの言葉に恐れをなし、男は逃げ出す。それをなのはが許すはずもない。なのはは、男を始末する呪文を叫ぶ。
「ディバインバスター」
なのはの持っている杖――レイジングハートから、光線が飛び出す。男は、それに貫かれ、絶命した。なのはは、男の死を確認する。そして、もう片方のところへ向かおうとした時だった。
バンッ。窓から音がした。女が外へ逃げた音だ。
「はやてちゃん。外！！」
なのはは、念話ではやてに指示を出す。指示を受けたはやては、屋根の上で対物ライフルを構え、待機していた。はやては、女を見つけたが、女は常人ならざるスピードで走っている。
「す、すごい速さやで」
「早く！！はやてちゃん」

なのはは、女に逃げられぬよう、はやてを急かす。
「でも、肉眼でこの暗さやで」
「人間なら問題だけど、はやてちゃんはもう人間じゃない。教えた通り撃てば、大丈夫。必ず当たる」
はやては意を決して、女が走っている方向に、銃を向ける。そして、顔についている2つの目ではない、第3の目とでもいうべきものを感じ取った。第3の目で女に狙いをつけ、引き金を引く。
はやてが引き金を引いた銃は、ただの銃ではない。対魔導師、悪魔用に改造した代物である。名称を、デバイスガンという。魔導師として、完全に覚醒してないはやてのために、用意したものだ。そのデバイスガンから、魔力弾が放たれ、女の心臓に当たる。女は血まみれとなり、道路上に倒れた。
（こんな大きい銃なのに、反動がほとんど感じなかった。夜なのに、昼間並みに見えた。うちの体、一体どうなちゃったんやろ――）
はやてはようやく、自分が人外の存在だということを自覚した。

海鳴市郊外にある屋敷――アースラ本部でクロノは、1人呟いていた。
「多すぎる。あまりにも多すぎる。悪魔が、あまりにも事件を起こしすぎる。それも三流、四流の雑魚ばかり。ただ無計画に、殺人を繰り返すだけ。先のない愚かな行動ばかりだ。まるで誰かが、悪魔を簡易に作り出しているよう……」

第2話（後書き）

2話目です。補足説明です。
はやてについて――はやては、まだ魔法が使えないので、代わりに長距離大火力の銃をぶっ放してる設定です。まあ、原作でも長距離広域型の魔法使いますし……
次回はアンデルセン神父が登場する回です。アンデルセン神父は誰になるのでしょうか？
感想アドバイス等いただけたら幸いです。

第3話

「こらー。2人ともやめなさい」
とある孤児院の庭。フェイト・テスタロッサは、孤児院の子供の喧嘩を仲裁していた。
「いったい、どうしたの？」
フェイトは、喧嘩をしていた2人の子供――エリオとキャロに喧嘩の理由をたずねる。
「キャロが先に殴ったんだ」
「エリオ君が本とるからでしょ」
「なんだとこのー」
「や・め・な・さ・い」
喧嘩が再発しそうになり、フェイトはそれを止める。
「友達に暴力を振るう子は、立派な大人になれないよ」
「ごめんなさいフェイトさん……」
「ごめんなさい……」
フェイトに叱られた2人は、素直に謝罪する。
「暴力を振るうなら、犯罪者か化物だけにしなさい」
「テスタロッサ執務官」
子供達を叱っているフェイトに、1人の女が声をかけてきた。
「よし。じゃあ、2人ともそろそろ部屋に戻りなさい」
「はーい。フェイトさん」
恐らく、『仕事』のことだろうと察したフェイトは、エリオとキャロを部屋へと帰す。
「一体どうしたの？　ギンガ」
辺りに、誰もいなくなったことを確認して、フェイトは話を切り出す。
「ここ最近、『アースラ』の活動地域で、悪魔絡みの事件が頻発していますよね。特に、海鳴市で」

「知ってるよ。でも『協定』もあるし、私たちの出る幕はないんじゃないのかな？」
「管理外世界の出来事なら……です」
「と、言うと？」
「管理局が追ってる悪魔が、アースラ活動地域に逃げ込みました。そして、アースラが動き出しています。局としても、それを黙ってみている訳にはいきません」
すなわち、その悪魔を始末して来いということである。その意図を理解したフェイトは、ギンガと呼んだ女に質問をぶつける。
「もし、アースラと衝突した際は？」
「起動六課は、法と正義執行の急先鋒です。彼らの挑戦を引く訳にはいきません」
「了解」
これから、楽しい出来事が起こるのを確信したかのように、フェイトは笑みを浮かべた。

なのはとはやては、今日も闇夜の中悪魔を狩っていた。今回の獲物は、廃校舎に住みついているとのことだ。この廃校舎は、近隣では有名な心霊スポットであり、それゆえ興味本位で近づいてくるものが後を絶たない。校舎内には、そういった者の成れの果てであるガジェットが、多数徘徊している。なのはは、そのガジェット達をアクセルシューターで撃ち倒していた。が、
「はやてちゃん、後よろしく」
唐突に、ガジェット退治の役を、はやてにバトンタッチしてしまった。
「えっ？　え？」
突然のことに驚くはやて。そんなはやてをよそに、なのはは近くの階段に腰をかける。どうやら本当にはやてに任せるらしい。こう

してる内にも、映画に出てくるゾンビのごとく、はやての方へガジェットは向かって来る。
「相手は人形、カボチャ人形や」
そう、自分に言い聞かせたはやては、デバイスガンを構え引き金を引いた。直径１２．７ｍｍの銃口から放たれた魔力弾が、標的となったガジェットの胴を２つに裂く。別のガジェットに狙いを定め、今度は頭を吹き飛ばす。そうして、ガジェットを次々に撃破し、全滅させた。周囲を血と臓物だらけにしたはやては、ひどく楽しそうな表情をしていた。それは、人間だった頃には想像もできない光景であった。
「はやてちゃんも、わかってきたみたいだね。悪魔がどういうものか」
はやての様子を見学していたなのはは、嬉しそうに呟く。
「さて、そろそろ目標の悪魔の所に――」
そう言いながら、立ち上がった瞬間だった。何本もの黄色い光の槍が飛来し、はやてに刺さる。間を開けずに、なのはは『閉じ込められた』という感覚に襲われた。
「プラズマランサーに結界……。これは」
なのはの前に、女がいた。月明かりが金の髪を映し出す。
「フェイトちゃん！！」
「１０年ぶりだね。なのは」

「大変だよ。クロノ君」
慌てた声で、エイミィ・リミエッタがアースラ局長室に入ってきた。
「どうしたんだ？」
エイミィの様子から、クロノは緊急事態を感じ取る。エイミィが、その緊急事態の内容を告げる。
「管理局が……機動六課が動いてる」
「六課がか！　規模は」

「規模はフェイト・テスタロッサ執務官唯1人」
「！！」
時空管理局機動六課。それは管理局の非公式部隊である。1から5まである機動課の存在しない6番目。管理局の法と正義執行の尖兵であり、犯罪組織以上に過激な集団として恐れられている。フェイトはその中でも、最強と名高い切り札であった。
「けど、何で六課がここに？　明らかに協定違反だよね」
エイミィが疑問を口にする。
「大方、連中の追ってる奴が逃げ込んできたんだろ。そうなれば連中は、協定なんて知ったこっちゃない」
エイミィの疑問に答えたクロノは、さらに言葉を続ける。
「問題はむしろ、なのは達とフェイト・テスタロッサの遭遇だ。出会ったら確実にロクでもないことしか起きない。ユーノ」
「わかってるよ。管理局との交渉は僕とエイミィに任せてくれ」
クロノの側にいた眼鏡の男――ユーノ・スクライアは、クロノの言わんとすることを察し、返事をする。それを聞いたクロノは、
「僕は、なのはの所に行く。そっちは任せた」
そう言って部屋を後にした。

「良い月だね。なのは」
なのはに語り掛けたフェイトの顔は嬉しそうであり、懐かしそうでもあった。一方のなのはも、それと同質の顔をしている。
「ぐうっ」
そんな2人の様子を見ていたはやては、痛みに耐えきれず悲鳴をあげる。
「急所は外してあるよ。久しぶりの仕事だからね。少しは楽しみがないと」
フェイトは、うつ伏せで床に倒れているはやてに視線を向けた。そして、すぐなのはに視線を戻す。
「ジュエルシード事件の後、アースラに入ったのは知ってたけど、

まさかこんなところで会うとは思ってなかったよ」
喋りながらフェイトは、なのはの方へ近づいてくる。
「ここにいた悪魔は？」
なのはは、フェイトに問う。
「もう始末したよ。楽しむ暇さえない雑魚だった」
フェイトは、さらになのはに近づく。そして、なのはの横を1歩分通り過ぎ、ちょうど背中合わせの格好になった。
「残りは、なのは達だけだ」
フェイトのその言葉が合図となった。2人は振り向き、互いに攻撃を仕掛ける。先制したのはフェイトだ。フェイトは、なのはの首に2本のプラズマランサーを刺した。だが、なのはのはその程度の損傷では、死なない体だ。なのはは、そのままフェイトの額に、アクセルシューターで穴をあける。フェイトは、後ろへ大きく飛び、壁にもたれる形で倒れた。普通の人間ならば確実に死んだ。そう判断したなのはは、フェイトに背を向け、はやての方へ行く。
「なのはちゃん！！」
はやてが、驚愕した表情で叫んだ。なぜなら、頭に風穴のあいたフェイトが、なのはの背後に立っていたからだ。フェイトは、光の刃の大鎌――バルディッシュを振り下ろす。なのははそれをかわし、今度は何発ものアクセルシュータをフェイトの体へと叩き込む。またも倒れたフェイトだが、すぐに起き上がり、反撃の体勢をとる。そしてプラズマランサーで、なのはの両手を壁へと縫い込んだ。
（何で死なないのっ）
なのはは不思議だった。なぜフェイトは致命傷を喰らっても、動き回れるのか。なぜさっき受けた傷が、もう回復しているのか。魔力の気配は、明らかに人間のである。なのになぜ。
「超治癒術……。なのは、君を倒すために編み出した技……」
なのはの疑問に答えるかのように、フェイトは呟いた。
「これで終わりだ」
そう言って、フェイトは壁に貼り付けられたなのはに、数多のプ

ラズマランサーを浴びせる。そしてバルディッシュで首を狩った。
廃校の校庭に1機のヘリコプターが降り立った。ヘリコプターから、専用のデバイス――デュランダルを持ったクロノと、拳銃型のデバイスガンを装備した2人組の護衛が出てきた。
「なのは達が戦闘に入ったのなら止めないと」
クロノ達は、なのはの元へと急いだ。

はやてはフェイトから逃げていた。手には、なのはの首を抱えている。アレは危険だ。そのままいたら殺される。そう思い、一瞬の隙をついて逃げ出したが、かなり深手の傷を負っていて、走ることはおろか、歩くのがやっとだ。　それでも最後の力を振り絞り、体に刺さっている光の槍を抜く。そして、窓から校舎を抜け出そうとして、窓ガラスに手をかける。だか、手をかけたら静電気に似た痛みがはしった。
「結界だよ。君が突破するのは不可能だ」
フェイトがそう言って現れた。死　死　死。はやての頭の中は、その単語で埋め尽くされる。自分は死刑囚だ。フェイトが近づいてくるたびに、処刑台の階段をのぼる。人生終了だ。いや、人ではなく悪魔だから悪魔生か。ともかく自分はここで終わる。そんな絶望感がはやてに駆け巡る。
「そこまでだ」
はやてにとって、救いともいえる声が響く。アースラ局長、クロノの声だ。
「ここは我々の管轄地域であり、重大な協定違反だ。すぐに退け」
「残念だけど、あなた達を相手に退く訳にはいかないっ」
フェイトは一瞬でクロノに詰め寄り、側にいた護衛2人の首を刎ねる。続けてクロノの首を刎ねようとしたが、クロノはそれをデュランダルで受け止めた。
「なのはっ！　いつまでそうして遊んでいる気だ。さっさと戻れ」

『にゃはは。ごめんクロノ君。はやてちゃんの怯えてる顔可愛くてさ』
クロノが怒鳴ると、どこからともなくなのはの声がした。声とともに床に魔法陣が出現する。
「フェイト・テスタロッサ。お前が管理局の天才魔導師であるように、なのはもまたアースラの鬼才魔導師だ。もう一度言う。おとなしく身を退け」
はやてが持っているなのはの首と、置き去られた胴体がピンクの光となり、魔法陣に集まる。光は人の形をとり、そこからはのはが出てきた。
「さーてフェイトちゃん。続きやる？」
なのはは、不適な笑みでフェイトに話し掛ける。
「なるほど。これじゃ分が悪いか」
フェイトの足元に魔法陣が浮かび上がる。
「続きはまた今度だね。なのは」
そう言ってフェイトは発光し、消えた。
「大丈夫かなのは」
「大丈夫。それにしてもフェイトちゃん。まさかこんな所で会うとはね。」
「な、な、なのはちゃん！？」
なのはとクロノの間に、間の抜けたはやての声が入ってきた。
「ピ、ピンピンしとるん！？」
「うん。この程度じゃ死なないよ」
「もしかしてあの時、逃げなくてもよかった？」
「まあ、そうだね」
「ウチの苦労って一体……」
はやてはその場でへたれこむ。
こうして、はやてにとっては、悪夢のような一夜が終わった。

第3話（後書き）

3話目です。一気に突っ走ったら、長くなってしまいました。次からは、気を付けよう思います。では補足説明いきます。

ギンガ――この話ではゲンヤの娘ではなく、フェイトのいた孤児院出身という設定になっています。理由は次話か次々話で説明します。とりあえずあと1、2回出番があります。

エイミィ――多分出番終了です。クロノとは結婚しておりません。

カボチャ人形――数年前、海鳴市で局地的ブームになった人形。はやてもストラップを持ってる。本編とは全く関係ない。

ご意見、感想等いただけたら幸いです。

第４話

提督会議。それは、アースラの最高機関である。その構成員たる議員は、日本政府と強力な繋がりを持っている者も多い。そして今、アースラ本部で会議が開かれていた。

「クロノ・ハラオウン局長。提督会議を召集したということは、余程のことであろうな？」

提督会議の議長であるギル・グレアムが、話を切り出す。

「私達が事件をもみ消すのも限界に近いわ。なにかつかめたの？」

クロノの母親であり、提督会議のメンバーでもあるリンディ・ハラオウンが言った。

「はい。我々が今まで撃破した悪魔、ガジェットを徹底的に調べました」

そう言ったクロノの手には、数センチメートルの大きさのＩＣチップのようなものがあった。

「なんだね？　それは」

グレアムが質問した。

「発信機の類かと。悪魔の体内、数ヶ所に埋め込まれていました。これで、悪魔の状態等を、調査していたと思われます」

「なっ、なにいぃ！？」

クロノの報告に、会議室がどよめく。

「それともう１つ」

クロノはさらに報告を続ける。

「ガジェットです。ガジェットとは、魔力素質がある者しかなりません。ですが、フェイト・テスタロッサと遭遇した際の任務では、あまりに数が多すぎました。更に、母体の悪魔が死ぬと全て死滅します。しかし、テスタロッサ執務官がすでに悪魔を倒していたにもかかわらず、アースラが突入した時、中はガジェットであふれてました」

そしてクロノは、こう結論づけた。
「これは、単なる自然発生的な事件ではありません。明らかに、後ろで誰かが糸をひいています」

アースラ本部裏門。
「そしたら、トーレ姉がクア姉の眼鏡叩き割ってグラサンにしてやるって、キレて大変だったんッスよー」
「ウルセーぞ。少しは静かにしろ」
「またそれッスか？　わかったッスよ」
2人組の女が会話をしていた。特徴的な語尾をつけているのは、ウェンディという名だ。もう1人はノーヴェという。
「これは大仕事だ。失敗は許されねーぞ」
軽口をたたいているウェンディに、事の重大さを認識させるため、ノーヴェは注意を促す。
「失敗？　ありえないッスよ。ありえない。朝メシ前もいいとこッス」
その言葉に、ウェンディは余裕シャクシャクといった様子で返事をした。
「そこの2人。ここは立ち入り禁止だ」
門に近づくノーヴェとウェンディに、警備員がこれ以上よらないよう警告する。
「そうなんッスか？　すいませんッス。アタシ達、ツアー客なんッスよ」
ウェンディは後ろのほうを指した。その先には、団体旅行用と思わしきバスが、2台ある。確かにツアー客のようだ。警備員が、そう思ったか思わなかったかの刹那、彼は銃撃を受け死んでいた。
「ちなみに、ツアー名は『アースラぶっ潰しツアー』ッスよ」

ウェンディがそう言うと、バスから門へ向けて多数の銃弾が飛んできた。その銃弾が、2人いる裏門の警備員を、ひき肉へと変える。
「やめっ、やめッス」
撃ち方やめをウェンディが叫ぶが、銃撃はすぐには止まらず、しばらくしてから止まった。
「そんじゃ征くッスよ」
ウェンディの合図で、バスの中から武装した集団が出てきた。サブマシンガンとシールドを持ち、迷彩服に覆面という、いかにも特殊部隊然した格好をしている。だが彼らは特殊部隊員ではなく、そもそも人間ですらない。悪魔に使役される兵隊、ガジェットである。ノーヴェとウェンディは、武装したガジェットを引きつれアースラ本部の中へと向かった。
アースラ本部に銃声が鳴り響く。それはアースラの警備員達のものであり、ガジェットのものでもあった。その銃声も人間の息絶える声、あるいは断末魔、それらが聞こえるたびに止んでいく。
「最高ッスね。こっちだけズルして無敵モードッスから」
ウェンディとガジェット軍は、死体をつくりながら建物の中を突き進む。

フッと会議室の明かりが消えた。
《こちら警備室。こちら警備室。ハラオウン局長っ！！》
同時に、警備員から通信が入ってきた。
「どうした。なにが起きた」
クロノがそれに応答する。警備員の声は、尋常ならざる様子だ。
クロノは嫌な予感しかしなかった。
《敵です。敵の攻撃です。外部との連絡がとれません。現在、1階正面玄関にて戦闘中》
「撃退しろ。無理なら時間をかせげ」
なぜ、嫌な予感は当たりやすいのだろう。苦々しく思いながら、

クロノは指示をだす。
《そっ、それが……敵は……敵は》
「落ち着け。正確に状況を伝えろ」
《敵はガジェットの軍隊ですっ！！》
返ってきたのは、先程の苦々しさを忘れる言葉だった。
「ガジェットの軍隊だと！？」
驚きのあまり、報告を復唱してしまうクロノ。それに続くように、突如上の方で爆発音がした。
「！！　今の音は……」
《恐らく、屋上のヘリが破壊された音だと思います。もう限界です。敵がすぐそこま……ぐあっあ……》
「警備室！どうした！！」
悲鳴を最後に、応答がなくなる。警備室は、敵の手に墜ちたのだと、容易に推測がついた。
《ハローハロー。提督会議のミナサマ、こんにちはッス》
代わりに、警備員ではない女の声が本部中に響く。
《アタシの名前は、ウェンディ。アースラぶっ潰しツアーのガイドッス。よろしくッスねー。そんなわけで、今からぶっ殺しにいくから、命乞いの準備でもしといたほうがいいッスよ。それじゃーねー》
そう言って通信が切れた。クロノは、ウェンディの人を小馬鹿にした喋り方、何よりこんな輩に自分の部下が殺されたことが、たまらなく不愉快だった。
「ユーノ、ユーノはどこだ」
そしてユーノに通信をつなぐ。

「な、なんやこれー」
ノーヴェとウェンディの襲撃の少し前、アースラ本部の地下室では、はやてが叫び声をあげていた。
「何って、『ラグナロク』だよ」

ユーノが、叫び声の原因となった物の名称を言った。３０ミリ対化物用デバイス『キャノン』ラグナロク――２メートル近くある全長に、直径３０ミリの銃口。それは正に、『銃』ではなく『砲』であった。
それにしても、これは大きすぎるとはやてが思っていると、ユーノは一緒にいるなのはにもなにかを渡した。
「なのはにも新しいカートリッジ。１発の出力をかなり上げといたよ」
「ありがとう、ユーノ君」
なのはが、ユーノに礼を述べる。
「これならフェイトちゃんも、倒しきれる」
悪魔的ともいえる笑みをなのはは浮かべた。
《ハローハロー。提督会議のミナサマ、こんにちはッス》
突然、知らない女の声がする。
《アタシの名前は、ウェンディ。アースラぶっ潰しツアーのガイドッス。よろしくッスねー。そんなわけで、今からぶっ殺しにいくから、命乞いの準備でもしといたほうがいいッスよ。それじゃーねー》
ウェンディと名乗る女の、耳障りな話がおわる。３人は、地上が危機的な状況だとすぐに考えが及んだ。それを証明するかのように、地下室に通信が入る。
《ユーノ、聞こえているか？》
通信者はクロノだ。
「聞こえてるよクロノ」
《緊急事態が起きた》
クロノはユーノに、上での出来事を説明した。
「なるほど。会議室への通路は１つだから、僕とはやてがそこの守備。なのが攻撃に出るのはどうかな？」
《だが、途中はガジェットだらけだぞ》
「通風孔を通る」
《そうか。わかった》

ユーノの作戦を了承したクロノは、ありったけの怒りをこめて言い放った。
《なのは、はやて、ユーノ。奴らを絶対に生かして帰すな》
「了承した」
そう言ってユーノは通信を切った。
「ユーノ君が闘うの久しぶりだよね？」
なのはの言葉通り、ユーノは数年前まで前線を担当していたが、今はデスクワークに撤している。
「僕とはやて、2人で1人前になるから大丈夫だろう」
「なら、心配ないね」
ユーノの答えになのはは、満足そうであった。
そしてはやては、馬鹿げた大きさの『ラグナロク』が自分に扱えるか心配だった。

第４話（後書き）

４話目になります。以下（どうでもいいのも含む）補足説明
リンディさん――ジュエルシード事件時に局長やってました。そして出世しました。
提督会議――船に乗ってきたのでこの名前になったという設定です。
ノーヴェはどこいった――ウェンディと２手に分かれてなのはさん探してます。
トーレとクアットロの喧嘩の理由――ガンダムＶＳガンダムＮＥＸＴＰＬＵＳで百式つかってるクアットロが、味方のトーレのシュピーゲルを何度も故意にメガ・バズーカ・ランチャーの巻き添えにしたのが原因。
感想アドバイス等いただけたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7491k/

なのシング

2010年10月9日20時28分発行